かも、本書第二編の「吉野歌集」の如き、気の遠くなるようなスケールの大きな仕事を、何年もかかって黙々として続けていたのである。私は、彼の日頃の努力と情熱の並一通りのものでないことを改めて知るとともに、そのひたむきな真摯な態度に、深い感動を覚えざるをえない。

二年ほど前、彼がそれまでの研究成果を一書にまとめたいという意向を伝えて来た時、私は双手をあげて賛成した。彼の研究論文の幾つかはすでに学界に発表され、それなりの評価は得ているようであるし、何よりも彼の永年の努力精励の成果は、十分公刊に値するものと判断したからである。

しかし、万葉学者でもない私には、実のところ本書が学界にどれほどの波紋を投ずるのかは予測できない。ただ、彼の純粋で誠実な人柄やひたむきな研究態度は、そのままに堅実な学問方法に連なっているようであり、その成果もおのずから斯学に重きをなすものであろう。

また、本書出版の意図は、今は亡き父君に対する彼の孝心も含まれたものであった。残念ながらその志は達せられなかったけれども、本書が彼の研究者としての確固たる自立を保証するものであることは間違いない。ここに万葉学者政所賢二氏の自立の宣言を心から讃えるとともに、今後の一層の研鑽と発展を祈るものである。

昭和六十二年　盛夏

中野幸一

目次

口絵
序……中野幸一 i

第一編　万葉論考

一、額田王の花鳥歌……3
二、持統御製歌考……15
三、「霞たつ」「霞たなびく」の表現について……27
——万葉集を中心に——
四、大伴旅人等の思京意識……38
——巻六香椎潟歌三首を中心に——
五、藤波の影——大伴家持の作歌精神について——……48
六、万葉歌と古今歌の相異……70
七、白鳳歌と天平歌……79

第二編　吉野歌集

吉野歌集編纂の意図……87
一、上代文学（記紀歌謡・万葉集・懐風藻）中の吉野歌……91
二、勅撰集及び新葉集中の吉野歌……106
三、吉野歌、各歌集歌番……167
四、上代文献から見た吉野歌……171
五、吉野歌関係史――古事記及び六国史――……183
六、吉野紀行――飛鳥から吉野へ――……197
七、吉野歌集――作者別索引――……206
――勅撰二十一代集及び新葉集――
八、吉野歌集――各句索引――……225
――勅撰二十一代集及び新葉集――
跋にかえて――私の研究遍歴……264

第一編　万葉論考

一、額田王の花鳥歌

天皇詔二内大臣藤原朝臣一競二憐春山萬花之艶秋山千葉之彩一時
額田王以一歌判之歌

冬ごもり　春さり来れば　鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山をしみ　入りても取らず
草深み取りても見ず　秋山の　木の葉を見ては黄葉をば　取りてそしのふ　青きをば　置きてそ嘆く　そこし恨
めし　秋山そ我は　（巻一一六）（塙本『萬葉集』に拠る、傍点稿者以下倣之）

右の歌は諸家揃って近江朝（天智六年〈六六七〉～鎌足の没する天智八年〈六六九〉十月以前）での作とする額田王の春秋優劣歌（以下王春秋歌と略称）である。まずこの歌を論ずる前にこの歌を取り巻く歴史的背景を概述して置きたい。

大化の改新の中心的推進者であった中大兄皇子は、母斉明天皇が百済救援のため筑紫へ赴き朝倉の行宮で急死（斉明七年〈六六一〉七月）してから約七年間即位することなく皇太子として執政を続けた。その間中大兄は、天智二年〈六六三〉八月、百済救援のために派遣した日本軍が唐の水軍と白村江で戦い大敗し、百済は滅亡、日本軍は多くの百済遺民と共に帰国するという苦い経験をしている。天智六年〈六六七〉三月、都を近江大津宮に遷す。この時の様子を